

少子高齢化社会の都市地域課題に対応した『現代版コミュニティカルテ』の 研究開発

コミュニティアセスメント研究会

代表 小泉秀樹（東京大学 工学部 都市工学科 教授）

要約

現代コミュニティにおいては、多様な課題が集積している。そして多様な課題の解決を、多様な主体の協業として行うことも求められている。このためには、地域の資源に根ざしながら行われる個々の問題解決アクションが、それらの総体としてみた場合でも、コミュニティの再生に寄与するように、相乗効果が得られるように、相互のアクションを調整することが求められる。

そのためには、共有された課題認識やビジョンのもとにアクションが行われることが必須である。共有された課題認識やビジョンを生み出すためには、そのベースとして、地域における資源の把握や再認識、コミュニティにおいて解決すべき問題の把握が必要であり、またそれら行為の過程が、主体・団体の形成や、主体間の新しい関係構築に、役立つものである必要が有る。

つまり、現代コミュニティの再生には、資源や問題の把握といったコミュニティの現状把握とともに、主体形成や主体間の関係構築を目的とした新しいコミュニティカルテないしは、コミュニティアセスメントが必要であると考えられる。

これまで、内外において、コミュニティカルテないしは類似の試みが主に都市計画・まちづくり分野で行われてきたが、近年、コミュニティ課題の複雑化にともない、同様の試みは、多様なテーマ・分野に展開しつつある。

そこで、本研究では、これまでのまちづくり分野での実践事例の蓄積を踏まえつつ、まず、コミュニティカルテの作成やアセスメントの実施に必要なデータの所在と情報化の方法論について理論的な検討を加えた。その上で、アートによるまちづくり、商店街再生、空家再生、地域拠点づくり、公衆衛生看護学、といった現代コミュニティの再生に関連した異なるテーマ・分野・アプローチから行われたコミュニティのアセスメント・診断事例を分野横断的に整理を行う。その上で、実践的に、少子高齢化社会のコミュニティ再生を主眼においた、コミュニティアセスメントを、首都圏郊外自治体、秋田市を対象に実施し、その可能性と課題を明らかにしている。

課題としては、カルテ作成やアセスメント実施だけではなく、それを基点としたコミュニティ再生にむけた体制や仕組みそのものを再検討する必要があることが明らかになった。特に、分野横断的な情報の活用、カルテ作成やアセスメント実施を多主体多分野での連携的な課題解決にむけた取り組みの導出につなげる方策、さらにアセスメントを中心とした循環的なサイクルによりそうしたコミュニティの課題解決にむけた活動を持続的に展開すること、などが重要な課題となっている。